

Nicholas Mele
531 W. Kellogg Road
Bellingham, WA 98226 USA

宗教者と原子力問題
ニコラス・メレ
パックス・クリスティ・USA

まずはじめに、いくつかお断りしておく。私は神学者でもなければ、牧師でもないが、核兵器廃絶に全力を傾ける信仰に基づく平和活動家であり、政治活動家である。そして、軍事目的であれ平和目的であれ、核技術が人間社会そして、創造物全体に与える影響を憂慮している。私はあらゆる宗教の人びとを尊敬し、協力するが、私自身はキリスト教徒であり、特にローマカトリックの教義に従って物を書いたり、話したりしている。私は外交官だったので、多くの国の核技術に対する姿勢に接してきたが、一番話せるのは、米国の核兵器やその維持、開発などに関することである。軍事政策や核技術の軍事利用に関して話した後に、民間あるいは平和利用の核技術と呼ばれる物に対する米国の宗教コミュニティの役割や立場について述べたいと思う。

核兵器や原子炉といった核技術はヘブライやキリストの聖書の世界観にはないが、核兵器や民間の核技術の只中に生きている私たちに直接話し掛ける言葉はたくさんある。私がよく思い出す言葉のひとつが列王記上第 19 章 11 節～13 節である。

主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

激しい風、地震、火というのは、核爆弾の特徴ではないだろうか。このようなすさまじく恐ろしいものの中に神はいない、とこの言葉は述べている。核兵器は神格化されるものではなく、道徳的でも倫理的でもない、というのが、今日のほとんどの宗教指導者の一致した考えである。政治家でさえ、核兵器は冷戦終結以降効果的でなくなっていると認めている。テロが増えていることで、核兵器はそれらを製造し、保管し、配備する国にとって、

脅威となっている。米国は核兵器を保持するために毎年約 300 億ドルを費やしており、それら核兵器やそれに相当する核物質の安全性のためにさらに 50～100 億ドル費やしている。¹ これらは、米国議会が収支を合わせるために教育費や社会保障費を削っている中で使われているお金である。核兵器は人間の命にかかわり、苦しみを生むものであるから、神学者やカトリック司教のような各宗派の指導者は、核兵器の保有は道徳的に間違っている、ということで概ね同意している。American Catholic Bishops は 1983 年に「平和への挑戦」² という公式文書の中で米国の核兵器による武装を条件付きで受け入れたが、それも冷戦終結時には意味をなさなくなっている。

米国のカトリック司教たちが今年 5 月、ホワイトハウスに嘆願書を提出し、大統領に「多くの核兵器を警戒しながら維持することは、事故や想定外の事態を招く危険性を増す。時代遅れの米国の核兵器戦略を終わらせ、核兵器の数を大幅に減らし、それらを運ぶ潜水艦、ミサイル、爆撃機を減らし、核兵器を厳戒態勢から外すよう求める。」³ と訴えたことは、宗教者の現在の核兵器に対する姿勢をよく示している。主な宗教の聖職者たちは核兵器の保有やその使用に反対する明確な道徳的立場をとっている。

神学者や宗教指導者といった人たちよりむしろ一般の人々に、こういった考え方が見られない。米国の核兵器に関する最近のドキュメンタリー「忘れ去られた兵器」⁴ というタイトルが示すように、ほとんどのアメリカ人にとって核兵器は、歓迎されないが政略上必要であったもので、もう忘れ去られたものなのである。宗教に基づく平和活動家が今しなければいけない事はこの国の核兵器が開発され、配備され、維持されていることを自国の宗教コミュニティに伝え教えることである。幸いオバマ政権が掲げる核兵器保有量の縮小政策には真実味がある。しかし議会では民主党、共和党両党からの反発もある。今年初頭、U.S. Conference of Catholic Bishops は国会議員経験者らによるビデオ討論を実施し、研究用資料をまとめて教会区に配布したが、教会区レベルでの活用が充分にはなされなかった。同様の資料はどの宗教コミュニティでも入手できるが、核兵器に関する認識度は冷戦終結以降急激にさめてきた。

Nevada Desert Experience や Fellowship of Reconciliation USA、カトリック労働者運動、そしてパックス・クリスティ・USA といった宗教団体はどこもここ何十年も核兵器反対を唱えており、ある程度成果も得ている。リチャード・ローズはその著書『愚かな兵器—核兵器開発競争への道』⁵ の中で、当時のソ連ゴルバチョフ大統領との会談でロナルド・レーガン大統領が大幅な核軍縮を提示することに積極的になったのは核兵器廃止運動（米国の奴隷制度廃止を進めた宗教運動に呼応して意識的に「廃止」としている）があったからだ、と述べている。真偽のほどは別にして、核兵器に反対する宗教団体は今までも、また現在も、核兵器を縮小し、廃絶する、という取り組みの最前線にいるのである。レー

ガン大統領時代のように、宗教に基づく活動家は他の廃絶論者団体との幅広い連携を進め、その運動は時に国民の心を捉えてその意見を核兵器増強反対に向かわせてきた。しかし現在は、経済問題や医療保険、定年退職などのことで頭がいっぱいの人々に、核兵器廃絶も最優先の問題とするよう説き伏せることが課題である。

大きな問題のひとつが、連邦政府が自由に使える金額の半分を優に超える額である米軍の支出の多さである。予算の不均衡を増大し、貧しい人々の口から食料を奪い、社会のセーフティーネットとして貧しい人々を救済する機会を提供するプログラムへの資金をも奪っている、というのが現実である。国民に情報を伝えるという我々の努力は成果を得てはいない。2012年7月の米国世論調査⁶では国民の76%が防衛費の大幅な縮小を望み、戦略核戦力費用の27%を削減することを望んでいた。フレンド会やメノナイトといった歴史のある平和志向の教派以外の宗教団体は、ここ数十年常にはっきりと核兵器問題に関して語ることがなかったからこそ、今現実即した議論が重要なのである。来年の「平和への挑戦」30周年記念に向けて、核兵器に関するカトリックの最新の見解を公表しようとする計画も、カトリック司教からの支援や関心の減少で行き詰っている。⁷かつて米軍の司教だった Bishop Edwin O'Brien⁸ が一貫して将来を予言するような発言をしているなど、司教の個人的な勇気ある言動も時には見られるが。宗教コミュニティにいる私たちはあらゆる機会をとらえて核兵器廃絶の必要性を信者たちに伝えなければならない。必要な資源は豊富にあるが、国防費を削減することが求めやすい経済状況である今、我々は努力を新たにしなければならない。

ここまで戦略核兵器について話してきたが、そのほかに軍用艦艇の動力と、劣化ウラン弾という2種類の核物質の軍事利用について話したい。原子力を動力としている軍用艦艇や潜水艦、航空母艦などは導入当初から議論的となっている。事故がおきたり人命が失われた例はほとんどないという点から一見安全に思われるが、それらの船が航海するかぎり放射性廃棄物が海岸や深海を汚染する可能性がある。大陸間ミサイルや長距離爆弾によって運ばれる戦略核兵器だけが注目されがちだが、米国の反核運動はあらゆる種類の核利用軍装備に反対している。宗教的信念により活動している活動家がとりわけ関心を持っているのは、軍事目的での核技術の利用をなくすことである。

劣化ウラン弾は長期にわたり環境に悪影響を及ぼす可能性があり、前述した戦略核兵器とこれから話す核技術の民間利用との中間的な位置づけとなる。たとえ戦略核兵器が使われなくても環境に影響を与えないとはいえないのである。米国では、宗教関係者は何度も協力して、兵器級のウラニウムやプルトニウムを精製する増殖炉からの放射性廃棄物だけでなく、貯蔵されている兵器用核分裂物質によって引き起こされる環境への悪影響や健康被害の問題に取り組んできた。ペルシャ湾で劣化ウラン兵器が使われてから、その非道徳性

は科学者や退役軍人組織、パックス・クリスティ・インターナショナルを含むその他多くの宗教関係の NGO によって認識されてきた。米国のイラク占領中は関心が高かったが、残念なことにその後宗教関係であれ、それ以外であれ、劣化ウラン弾の問題に継続して取り組んでいる組織は少数である。⁹

劣化ウラン兵器同様、民間利用もしくは平和目的の核技術も、人体に直接影響を与え、時には原子力施設から遠く離れたところに住んでいる人にも影響がある。フクシマに悲惨な事態をもたらした 3 月 11 日の地震が起こる前から、原子力発電所事故の環境への影響はよく知られていた。さらに最近では生物医学の研究の進展によって、医学的な核技術の利用ですら長期にわたる有害な結果をもたらすかもしれないことがわかってきている。このような核技術や核物質がはらむ危険性は最近わかったことではないが、私たちは予期せぬ重大な事態が起こり、その影響が何世代も続く可能性があることに気づきはじめた。

1979 年のスリーマイル島の事故¹⁰では、米国東海岸の人口密集地の近くの大気や水に放射性物質が放出された。良いニュースは、この事故以来、新たな原子力発電所の建設への国民の支持がほぼなくなったことである。実際、米国で現在稼働している 104 の原子炉の全てがスリーマイル島事故の 5 年前である 1974 年以前に完成していたか、着工していた。米国企業は他国で原子炉を建設し、また国内で消費される電力のうちの約 20% を原子力によって作り出してはいるが、スリーマイル島事故以降、国内で新たな原子炉は竣工していない。¹¹それは事故後に施行された新たな規制による部分もあるが、1979 年以降原子力に対する一般の人々の支持がほぼなくなったことが大きい。スリーマイル島での部分的なメルトダウンが起こる前からその傾向はあった。ここ日本では 2011 年 3 月にメルトダウンが起こったことで、政府や原子力業界が最新技術を使って建設しようとしていた新たな原子力発電所への支持を得ることは難しくなった。¹²

なぜ 30 年以上にもわたって、国民の支持が減少し、ごくわずかになったのだろうか。スリーマイル島、チェルノブイリ、そして今回の福島第一原発など数々の事故があって、原子力発電は、化石燃料の代替物としては危険な方法であるということを繰り返し知らされたということもある。また冷戦時代の初期に実行された公共安全計画や原爆実験が、多くの人々に核技術による放射能及びその他の影響への不安を生んだという面もある。小説や映画といった大衆文化も、米国民を原子力エネルギーの素晴らしさという魔法から目覚めさせる役割を果たした。

最近では、化石燃料を太陽光、風力、潮力発電などによる代替エネルギーにおきかえようという動きが、環境保護主義者たちの想像力をかきたて、同時に、これらの技術の発展により電力源の確保が可能になるとの希望をもたらすこととなっている。また、価格が低下

した天然ガスが、安くて比較的クリーンでなじみのある代替エネルギーとして、危険で最終的に環境負荷が高いと認識されるようになった原子力技術にとってかわる可能性も生まれている。¹³ 核廃棄物の保管をめぐる議論や、また私の故郷であるワシントン州のトリシティズ(Tri-Cities Kennewick, Pasco, Richland)地域で放射性廃棄物によって上水道が汚染されたという環境問題もあり、¹⁴ 原子力発電技術への関心が高まり、新たに利用を始める準備はいまだできていないと認識するようになった。この10年、テロリストが核物質を使用した放射能汚染爆弾を使うのではないかとの恐れも、原子力発電所への依存度の高まりについて懸念が増している要因かもしれない。

核技術の発展を抑制することにおいて宗教コミュニティの果たす役割は何だっただろう。ここ40年以上、原子力発電への支持がとても低かったこともあり、原子力発電については、核兵器および核戦略のように、教会の公的声明の主要な論点・焦点にはなっていなかった。むしろ宗教者たちは、あらゆる種類の核技術を、すべての創造物の保全について人間がいかに関わっていくかという問いかけの一部とみなしていた。米国で初めてのアースデイの式典では、軍備撤廃への努力やホスピタリティ・ハウスにより著名なドロシー・デイ(Dorothy Day)らの挨拶が注目された。¹⁵ アース・フラッグのデザイナーであり国際アースデイの創設者であるジョン・マコネル(John McConnell)も伝道者の息子であり、Pentecostal Christian community¹⁶で育った人である。彼は、非暴力を求めるキリストの呼びかけを知って環境問題に関心を持つようになった。

あらゆる宗教団体の指導者や予言は、現代の環境問題への関心を持って活動し、特に気候変動や持続可能な技術とその実践に取り組んでいる。Interfaith Power and Light,¹⁷ Earth Ministry,¹⁸ 350.orgなどの組織は全て、こうした問題に懸念を示す宗教者が設立し、リーダーとして活動を継続してきた。私自身が属するパックス・クリスティ USAもまた、非暴力の呼びかけが私たちを創造物の保全に導くことを以前から実感してきた。核兵器に反対することが、私たちがこの地球や全ての生き物、特に人間社会に対するあらゆる核技術の有害な影響に注意を向けることになるのである。

結論として強調したいのは、宗教者が自分のコミュニティ内で何を実践しているかではなく、別のコミュニティや異なる信仰を持つ人々と連携して何を実践しているかということである。私が長年関わってきた核廃絶運動の中に一つの例がある。かなり最近までパックス・クリスティ USAは、多くの皆さんがよくご存じの国際的な運動「アボリション2000」のアメリカ担当として事務局を務めてきた。米国内のメンバーリストを眺めると、非宗教組織、宗教を超えた組織、および宗派別の組織などの熱心な参加がうかがえる。目的を共にするものが全て連携して動くことで、核兵器の削減においても、また創造物の保全に対する意識啓発においても、相当めざましい成果を上げてきた。

最初に引用した列王記上の一節を思い起こしてほしい。神の声は多くの場合とても静かで聞こえにくい。しかし、その神の声こそが、私たちを大地を揺るがす火や風から守り、全ての創造物、人間と人間以外、生物と無生物の復元と正義へと導いてくれるのである。ありがとうございました。

訳注 1 <http://armscontrol.org/factsheets/USNuclearModernization>

The Unmooring American Military Power(Crown publishers 2012 Rachel Maddow 著 第9章) も参照のこと

訳注 2 *Challenge of Peace* 要約 1.B 2.B

訳注 3 電子版 National Catholic Reporter

<http://ncronline.org/news/nscsb-joins-petition-asking-us-change-outdated-nuclear-policy>

訳注 4 *The Forgotten Bomb*, Bud Ryan and Stuart Overbey

2012年1月 Cinema Libre Studios よりDVD発売

訳注 5 *Arsenals of Folly: The Making of the Nuclear Arms Race*

(Richard Rhodes, Knopf. 2007)

訳注 6 Air Force Times 2012年7月16日：世論調査：Most Americans Support Defense Cuts

訳注 7 Thomas Gumbleton 司教との対談

訳注 8 オブライエン司教は戦略空軍総司令部将校や国家安全保障関係などに核兵器の倫理的側面について話した。2009年オマハでのスピーチ、2010年スピーチ「米国核兵器戦略における道徳的反省」など。

訳注 9 米国の組織一覧表 <http://www.bandepleteduranium.org/en/members>

訳注 10 スリーマイル島に関する詳細は次のサイトへ

www.threemaileisland.org

<http://www.nrc.gov/reading-rm/doc-collections/fact-sheets/3mile-isle.html>

訳注 11 米国原子力規制委員会で7基の新設許可が下りているが、そのうち何基が建設にいたるのか不明である。

訳注 12 <http://thebulletin.org/web-edition/features/nuclear-power-and-the-public>

訳注 13 ピューセンターの世論調査結果

<http://pewresearch.org/topics/energyandenvironment/>

訳注 14 ウィキペディア http://en.wikipedia.org/wiki/Hanford_Site

訳注 15 <http://www.catholicworker.org.dorothyday/daytext.cfm?TextID=3>

訳注 16 <http://www.earthsite.org/john.htm>

訳注 17 <http://interfaithpowerandlight.org/>

訳注 18 <http://earthministry.org/>